

平成21年5月20日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18520086

研究課題名（和文） 仏教美術における絵画と彫刻

研究課題名（英文） The Relationship between Paintings and Sculptures in Japanese Buddhist Arts

研究代表者

藤岡 穰 (FUJIOKA YUTAKA)

大阪大学・文学研究科・准教授

研究者番号：70314341

研究成果の概要：日本の仏教美術に関する研究は、従来、絵画や彫刻といったジャンル別の研究が主流であった。本研究は、それに対して、異なるジャンル間の相互の影響関係、ジャンルによる表現の異同の様相などを明らかにしながら、ジャンルの枠を超えた総合的な研究を目指すものである。こうした研究は、短期間のうちに容易に達成されるものではなく、本研究ではまさにその端緒に着いたばかりであるが、今後も引き続きジャンルごとの研究成果の共有化をはかり、より総合的な研究を目指していきたい。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,000,000	0	1,000,000
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	540,000	3,340,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史

キーワード：仏教美術、絵画、画像、彫刻、十二神将、説法印毘盧舎那如来、持幡童子、範道生

1. 研究開始当初の背景

日本美術史研究は、明治時代以来、絵画・彫刻・書蹟・工芸といった分野別の研究が主流をなしてきた。その要因には、たとえば各分野の時代による盛衰や遺存状況の相違、美術史学における様式比較の容易さ、実技における分野区分の存在といった諸事情が考えられ、制作技法の理解や保存修復技術の開発、作品の保管など行政ないし博物学的な立場においても確かに分野別の利点は少なくな

い。しかしながら、西洋美術史をはじめ、他の地域の美術史においてはむしろ地域別、時代別の研究が中心であり、それに比べてとき、日本美術史研究のそうした縦割りのあり方はきわめて特殊である。仏教美術に関して言えば、絵画も彫刻も典拠とされたテキストや画像に共通性があり、かつ絵画と彫刻が同じ空間において機能を果たしていた事例も少なくない。それゆえ、日本美術史研究における彫刻と絵画との乖離は、仏教美術の研究にとっても大きな障害ともなってきた。

2. 研究の目的

本研究は、1. 研究開始当初の背景に記したような問題意識に基づき、主として日本の仏教美術を対象として、絵画と彫刻（厳密には雕塑）、あるいは工芸も含めた相異なるメディアの相関性に改めて着目し、美術史学という立場から積極的にメディアの相違を乗り越えていくことをめざしたものである。

また、本研究は、近年盛んな図様解釈論、受容論とは異なり、様式論の復権をめざす点にも特色がある。もっとも、絵画と彫刻の双方を対象とし、その相関性を検証するためには、これまでの分野別の様式比較のように、作品を羅列するだけでは不可能であり、逆に受容論や図様解釈論の最新の成果を踏まえることが肝要である。むしろ、それを踏まえることによって、初めて絵画と彫刻の形態の相関性を同じ俎上で論じ、その様式の複雑な関係性を解き明かすことができるはずである。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するうえでは、メディアを超えて総合的に作品を把握するとともに、従来、ジャンルの枠を大きく規定してきた2つの傷害を乗り越えなければならない。すなわち、第1に、実作例においては確かに絵画と彫刻には異なる伝統が存し、2次元と3次元というメディアの相違によって截然と表現が区別されている事実があり、絵画と彫刻とを総合的に把握するためには、逆にそうしたメディアによる表現の異同を知ることにも重要な課題であること、第2に、絵画と彫刻のいずれのメディアに対しても様式や技法に一定の理解がなければ、やはり統合的にみる視点は築けないことである。

このように、実際には、上記の研究目的は短期間に容易に達成されるものではなく、まずはその端緒を開くということが肝心であると考えられた。そこで、まずは研究代表者が所属する研究室に在籍し、仏教美術を専門領域とする大学院生とともに問題意識の共有化をはかり、各人が絵画、彫刻といった分野別の意識を極力捨て、総合的に作品を見ることを心がけた。具体的には、各人が特定の主題を研究テーマにかかげ、ジャンルを超えて網羅的に作品を把握することに努めた。また、問題意識の共有化のために、ジャンルを超えて作品の共同調査を実施し、情報を共有化し、さらに様々な場で議論を重ねてきた。

4. 研究成果

2006～2007 年度の大阪府茨木市文化財調査、2006 年度 10 月の福井県おおい町文化財調査、2007 年度 7～9 月の京都市随心院文化財調査、同年度 11 月の東京国立博物館調査をはじめ、日本の各地で共同調査を実施したほか、中国浙江省（杭州西湖石窟、浙江省博物館、南宋石刻館、温州市博物館など）・江蘇省（瑞光塔、虎丘雲岩寺塔、江蘇省博物館）・上海（上海博物館）、新疆（キジル石窟、クムトラ石窟など）においても共同調査を実施し、その結果、当初目論んでいた日本の平安、鎌倉時代の仏教美術にとどまらず、中国のそれをも視野に入れた幅広い研究を推進できた。

研究代表者のほか大学院生 5 人の具体的な研究成果は、最終的に刊行した論文集、『平成 18 年度～平成 20 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））「仏教美術における絵画と彫刻」研究成果報告書』に集約されている。それぞれの論文のテーマ、概要は以下のとおりである。

(1) 藤岡穰「仏師のダイナミズム—密教図像から彫像へ—」

平安初期の密教請来以降、鎌倉時代書紀にいたるまでの彫刻作品を対象に、密教図像をいかに立体化したか、密教図像のもつ規範性と彫刻家（仏師）の創造性に焦点をあててその変遷を論じた。その結果、10 世紀を密教図像重視の時代、11 世紀前半に登場した定朝を彫刻性復権の旗手と位置付けるとともに、さらに運慶と快慶の図像に対する姿勢の相違を明らかにした。

(2) 山口隆介「鎌倉時代前期の十二神将造像と図像」

旧浄瑠璃寺、興福寺東金堂、曹源寺にそれぞれ伝来した鎌倉前期の十二神将像をとりあげ、定智本十二神将像と『覚禅鈔』所載「世流布像」との関係に着目してその異同を論じた。旧浄瑠璃寺像は、定智本とともに醍醐寺薬師十二神将図像に基づくもので、それぞれを忠実に再現しながら、一方では細部に変更を加え、十二体の統一的な表現を図っていること、東金堂像は定智本と密接な関係のなる細密な図像を下敷きにした可能性が高く、かつ服制に強い統一性がみられ、また宋代図様を積極的に採用しているなど、両者の図像写しの傾向が異なることを指摘した。また、曹源寺像については、大仏殿様四天王との類似が注目されること、制作年代についても従来の 12

世紀末説に再検討が必要であることを指摘した。

(3) 鈴木雅子「冥府からの使者—持幡童子の源流をめぐって—」

禅林寺山越阿弥陀図や法華寺阿弥陀来迎図などにみられる持幡童子をめぐって、その源流が十王経などに説かれ、宋代の地藏十王像の絵画、彫刻作例を広く見渡した結果、それらに登場する冥界の使者たる善悪童子に求められる可能性を指摘し、また幡が冥界ないし異界からの使者を想起させることなどを指摘した。また、そのことは禅林寺山越阿弥陀の四天王が冥界の使者として解釈可能であることも符合することを確認している。

(4) 森實久美子「東アジアにおける説法印毘盧舎那如来をめぐって」

華嚴海会善知識曼荼羅に描かれる説法印毘盧舎那像の位置付けをめぐって、広く東アジアの絵画、彫刻にそれに関連する作例を博捜し、そうした手印は唐代の薬師などにもみられること、韓半島においては智拳印毘盧舎那の伝統が根強く、説法印毘盧舎那が造形化されるようになるのは14世紀以降とみられることなどを指摘した。

(5) 古谷優子「福聚寺所蔵 達磨・韋駄天・華光菩薩画像について—範道生の絵画と彫刻—」

北九州市の福聚寺に伝わる、中国から渡来した仏師範道生の作とみられる達磨、韋駄天、華光菩薩について考察した。寺史、作品の基礎データなどの確認に続き、これらの絵画作例をもとにしたとみられる同寺に伝わる木像の韋駄天、華光菩薩との比較、あるいはそれら福聚寺木彫像と萬福寺に伝わる範道生作の木彫羅漢像との比較、さらには範道生自身の木造と画像との比較など、範道生を例にとりあげながら、彫刻と絵画との関係について多角的に検討を試みたものである。

(6) 三田覚之「法隆寺献納宝物「刺繍残片」の基礎的考察」

東京国立博物館が所蔵する法隆寺献納宝物のうち、中宮寺に伝来した天寿国繡帳との類似も指摘される52個の刺繍残片についての調査に基づく技法に関する分析と図様の復元、さらには制作年代に関する考察である。その結果、天寿国繡帳とは技法的にも図様のにもむしろ径庭があり、たとえば文様については同じく法隆寺献納宝物の金堂灌頂幡な

どに類似が指摘できるなど、7世紀後半ないし末頃の作例と位置付けられるとの結論が得られた。工芸分野は、さらに金工、染織、漆芸など細かくジャンルが分けられ、研究が行われがちであるが、そうしたジャンルを超えた比較検討を行った点に本研究としての成果が発揮されている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

① 藤岡穰「仏像の受容と変容—インドから中国、東南アジアへ—」秋田茂・桃木至朗編『歴史学のフロンティア 地域から問い直す国民国家史観』、大阪大学出版会、2008年、pp. 213-238、査読無、巻数無

② 藤岡穰「石造釈迦三尊像」『国華』1324号、pp. 34-35、2006年、査読有

[学会発表] (計4件)

① 藤岡穰「興福寺の鎌倉復興造像と縁起」(研究集会「南都復興における縁起と美術」、2007年12月21日、春日大社景雲殿)

② 藤岡穰「仏師のダイナミズム—密教図像から彫像へ—」(国際シンポジウム「仏教学を超えて：日本仏教研究の新しい方向」、2007年11月3日、ハーヴァード大学)

③ 藤岡穰「呉越～宋彫刻と平安～鎌倉彫刻」(物語／絵画研究会、2007年7月22日、奈良女子大学)

④ 藤岡穰「興福寺南円堂四天王の再検討—新たな運慶イメージの構築—」(南都文化研究会、2007年6月10日、春日大社)

[図書] (計1件)

① 藤岡穰 (責任編集)・朝賀浩・久米雅雄『新脩茨木市史 第九巻 史料編美術工芸』茨木市、2008年、総ページ数368

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤岡 穰 (FUJIOKA YUTAKA)

大阪大学・文学研究科・准教授

研究者番号：70314341

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

古谷 優子 (FURUYA YUKO)

大阪大学・大学院文学研究科・博士後期課程 3 年／北九州市立自然史・歴史博物館・学芸員

森實 久美子 (MORIZANE KUMIKO)

大阪大学・大学院文学研究科・博士後期課程 3 年

鈴木 雅子 (SUZUKI MASAKO)

大阪大学・大学院文学研究科・博士後期課程 3 年

三田 覚之 (MITA KAKUYUKI)

大阪大学・大学院文学研究科・博士後期課程 2 年

山口 隆介 (YAMAGUCHI RYUSUKE)

大阪大学・大学院文学研究科・博士後期課程 2 年